

ヨーゼフ・ロート研究史概観

依田哲朗

ヨーゼフ・ロートは20世紀オーストリア文学を代表する作家のひとりである。1894年、オーストリア＝ハンガリー帝国の帝室領ガリチア地方のプロディ（現ウクライナ）のユダヤ人家庭に生まれたロートは、当時、ポーランド人、ウクライナ人、ユダヤ人、オーストリア人、ドイツ人など多民族が共生する環境下で育ち、1913年、ウィーン大学進学を機に、長年の憧れだった西欧への移住を果たした。その後、フランクフルト新聞の特派員となり、世界各地を転々とし、旅行記、ルポルタージュ、批評、小説と様々な文芸ジャンルを横断しながら、旺盛な執筆活動を展開する。ナチスから逃れるためにたどり着いたパリが、彼の終の住み処となり、1939年、極度のアルコール依存症に苦しみながら、まだ44歳という若さでこの世を去った。

パリで行われた葬儀の際、この作家を象徴する、ある事件が起こる。ハプスブルク家の代表者としてトラウトマンズドルフ伯爵が、墓前で「帝国の忠実な戦士ヨーゼフ・ロート」に敬意を表すると、故人が左翼主義に傾倒して「赤いロート」を自称した時代に、活動を共にしたフランクフルト新聞の同僚エゴン・エルヴィン・キッシュをはじめとして、多くの共産主義者たちが「君主主義の独占行為だ」と抗議を始めたのである。また、カトリックの司祭の葬儀進行に対し、参列していた東方ユダヤ人たちからは不満が噴出し、最終的にロートはユダヤ教の祈り„Kaddisch“に包まれながら、カトリックの様式にのっとして埋葬されたということである。¹「共産主義を夢見た、革新的左翼主義者」、「在りし日のハプスブルク帝国へ回帰する、君主主義者」、「西欧カトリックに改宗した、同化ユダヤ人」、「精神的故郷回帰を果たした、東方ユダヤ人」、「時代の先端を走る、売れっ子ジャーナリスト」、「反進歩主義的な、古典物語作家」。一体、ヨーゼフ・ロートとは何者だったのか？

ロートは最初、小説家というよりも、洗練されたルポルタージュを書くジャーナリストとして有名であり、オーストリアの作家ローベルト・ノイマン（1897-1975）は、ベストセラー小説『ヨブ』（1930）、代表作『ラデツキー行進曲』（1932）が出版されるまで「ロートが小説を書いていることに全く気付かなかった」と述べている。またノイマンは、同時期にヒトラーが台頭してきたことで「『ラデツキー行進曲』を読むよりも、私たちは皆、別の気がかりができてしまったのだ」²とも語っており、ヒトラーの政権掌握後、ユ

1) Vgl. David Bronsen: Joseph Roth. Eine Biographie. Köln 1974, S. 602ff.

2) Marcel Reich-Ranicki: Joseph Roth, der Romancier. In: Michael Kessler / Fritz Hackert (Hrsg.): Joseph Roth Interpretation – Kritik – Rezeption. Tübingen 1994, S. 261-268, hier: S. 261.

ダヤ人作家の本が焚書対象にされたことや、パリでの亡命生活中、ロートが頼ったオランダのドイツ人亡命文学出版社が、ナチスによって閉鎖されたことも相まって、³ヨーゼフ・ロートの存在は人々の記憶から急速に忘れ去られていった。

再び作家が日の目を見るようになるのは、1956年にヘルマン・ケステンが編集した『ロート選集三巻本』⁴が出版されてからである。ここからいわゆるロート・ルネサンスが起り、それと同時に本格的なロート研究が始まっていく。イタリア出身のドイツ文学研究者クラウディオ・マグリスは、著書『オーストリア文学とハプスブルク神話』(1963)の中で、ロートを「在りし日の帝国へ回帰する」代表的な作家として取り上げ、「ナチスの勢力が広がるにしたがって、幸福であったハプスブルク時代へのロートの憧憬と回帰はいっそう強まったのだ」⁵と論じ、代表作『ラデツキー行進曲』を考察の中心に据えながら、故国オーストリア＝ハンガリー帝国を喪失した、ユダヤ人作家の作品の中に「懐古的ユートピア」の傾向があることを発見した。続いてアメリカの研究者デヴィッド・ブロンセンが、自身の卓越した外国語能力を活かし、文献資料のみならず、世界中に散らばっていた300人にも及ぶロート関係者たちへインタビューを行い、それ以降ロート研究において、もっとも頻繁に参照されることになる『ヨーゼフ・ロートの伝記』(1974)を出版する。ブロンセンは、ロートの友人知人にインタビューを行う中で、この作家が異常なまでに自身の経歴や信条について「虚偽報告」を行ってきたことを発見し、ときにそうしたロートの「虚言癖」に翻弄されながらも、それまで隠蔽、詐称されてきた作家の真の出生地が、ガリチアのプロディであることを突き止める。ブロンセンは、この田舎出身の東欧ユダヤ人作家による「隠蔽工作」に、彼の故郷に対する「拒絶」と「愛着」の入り混じった複雑な感情を読み取り、「ロートは若き日に見捨てたはずの故郷を、後に東欧の文学的造形の中で再発見したのだ」⁶と結論付けた。マグリスが『オーストリア文学とハプスブルク神話』の中で、「老皇帝への賛辞」や「官僚主義」といった、中央集権的な帝国表象に作家の郷愁を見出したのに対し、ブロンセンはロートの故郷ガリチアに対する屈折した態度と、後期作品群に特徴的な東欧表象を結び付けることで、作家の「精神的故郷回帰」の傾向を強調したのだ。

以降長きにわたって、ロートの「在りし日の帝国回帰」は研究者間の共通認識となり、それをもとにした、作品に関する詳細な分析が行われていく。ロートの中央集権的な帝国表象に焦点を当てたものとしては、マルタ・ベルシングの論文「後ろ向きのユートピアーヨーゼフ・ロートの『ラデツキー行進曲』における社会心理学的所見」⁷や、マルセル・ライヒ＝ラニツキの「ヨーゼフ・ロートという作家」⁸が挙げられるであろう。ベルシング

3) 平田達治：『放浪のユダヤ人作家 ヨーゼフ・ロート』、鳥影社、2013年、436頁参照。

4) Joseph Roth: Werke. 3 Bde. Hrsg. von Hermann Kesten. Köln – Berlin 1956.

5) イタリア語で書かれた『オーストリア文学とハプスブルク神話』(1963)は、1966年に翻訳のドイツ語版が出版された。本稿では1966年に出版されたドイツ語版を参照する。 Vgl. Claudio Magris: Der habsburgische Mythos in der österreichischen Literatur. Salzburg 1966, S. 261f.

6) David Bronsen: a.a.O., S. 43.

は『ラデツキー行進曲』の中で繰り返し描かれる、皇帝、軍人、農民、家族間の「主従関係」に着目し、そうした関係にありながらも「個人」の人間性が重んじられ、「兄弟」や「友情」といった言葉へ、階層の差異が融解する点に「旧ハプスブルク帝国体制の素晴らしさと、道徳的な正当性といった、ロートの理想が体现されている」⁹⁾と論じた。また、ライヒ＝ラニツキは、かつて共産主義に社会的ユートピアを見出したロートが、ロシア旅行で惨憺たる実態を目の当たりにし、さらには第一次大戦後のドイツ、オーストリアの政治状況に失望を深める中で「彼は、もはや放埒なボヘミアンの気質でしか、自身の不十分な、永遠に流浪する性質（ユダヤ性）を偽装できないということが、いよいよ明らかとなり、失われたパラダイスへの欲求はますます増大したのだ」と論じた。ライヒ＝ラニツキは、ロートが「わたしのただ一つの祖国」と呼んだハプスブルク帝国を、東欧出身のユダヤ人作家の「失われたパラダイス」と見立て、そこに「ユダヤ的なものとカトリック的なものの、矛盾なき調和」、及び作家の「飲酒癖」に絡めた「現実逃避」の傾向を見出し、「幸福であったハプスブルク時代への回帰」傾向をよりいっそう強調することとなった。¹⁰⁾

一方で、東欧ウクライナやポーランドに拠点を置く研究者たちは、また少し違ったアプローチを見せる。例えばウクライナ出身の研究者ラリッサ・シベンコは、ヴァルター・ベンヤミンや、アライダ・アスマンの「想起」や「記憶」に関する言説を参照し、ロートの東欧表象を文学理論に即して解釈した。彼女は「もし本物のガリチアを考察するならば、かつての多言語環境にあった、東欧のこの土地はとっくに消失してしまっているが、ガリチアは詩人たちの言語の中で、郷愁の非場所として、多くの人々の神話や創造性の場所として現存している」¹¹⁾と述べ、ロートのガリチア描写に、作家固有の「想像的」で「美的」な、「非現実的ユートピア」があることを論じている。筆者は2019年、ウィーン大学留学中、シベンコが比較文学科で開講していたゼミナール「文学表象におけるガリチアの幼年期と青年期のトポグラフィ」に参加したが、彼女はここでロートの未完小説草稿『野いちご』（1929）を取り上げ、この作品を作家の「幼年期のユートピア」として講釈していた。しかしながら、日本のドイツ文学研究者平野嘉彦が指摘しているように、この草稿内の表象には絶えず「反転する概念」¹²⁾が立ち現れ、それはときにユートピアと不可分な「ディストピア」をも内包する。シベンコは、『野いちご』の中のガリチアを想起させる豊かな自然描写を、もっぱら作家の幼年期に起因する「憂いなき郷愁」として解するのだが、この草稿内に忌まわしいポグロム（ユダヤ人迫害）の記憶が、さり気なく記述されて

7) Martha Wörsching: Die rückwärts gewandte Utopie – Sozialpsychologische Anmerkungen zu Joseph Roths Roman »Radetzkymarsch« In: Heinz Ludwig Arnold (Hrsg.): Text + Kritik Sonderband Joseph Roth. München 1982, S. 90-100.

8) Marcel Reich-Ranicki: a.a.O., S. 261-268.

9) Martha Wörsching: a.a.O., S. 97f.

10) Vgl. Marcel Reich-Ranicki: a.a.O., S. 265f.

11) Vgl. Larissa Cybenko: LITERARISCHE LANDSCHAFTSWAHRNEHMUNG VON OSTGALIZIEN BEI JOSEPH ROTH, <http://www.ji.lviv.ua/n9texts/cybenko.htm> (2021年8月17日閲覧)

12) 平野嘉彦:「ある詐欺師の肖像」— ヨーゼフ・ロート、『獣たちの伝説』所収、みすず書房、2001年、105-124頁、参照箇所は114頁以下。

いることを見逃してはならない。後に、この草稿の素材が丸ごと投入される『偽りの分銅』(1937)では、ガリチアがモデルとされる異郷の地ズロトグロートで、主人公が「地獄」を経験し、命を落とすことも考え合わせれば、『野いちご』を「東欧の自然賛歌」の文脈から一元的に「作家の幼年期のユートピア」と結論付けることは、早計であると言わざるをえないのだ。

その点、ポーランド出身の研究者マリア・クランスカは、シベンコに比べ、やや慎重な態度をとっている。彼女は平野と同様にロートのガリチア描写には「二面性」があることを指摘し、そこに「故郷 (Heimat) — 異郷 (Fremde)」の概念が、同時に出来る点に着目する。クランスカは故郷の概念に、シベンコ同様「多民族共生の平和な土地」、「農民の聖地」、「自然の風景」といったユートピアの側面を見ているが、一方で異郷の概念には「危険や没落を予感させる、不幸をはらんだ土地」、「第一次大戦、ポグロム、民族間の緊張が支配する場」といったディストピアの側面も見ている。¹³しかしながら彼女は、このネガティブなイメージを内包する「異郷」を扱いかねる。「異郷が描かれることで、ロート作品には多面的、魅惑的な世界が生まれ」、「この二面性が、ロートのガリチア描写に魔法をもたらすのだ」¹⁴と、「異郷」にからめた作家の文学表象の拡がりについて言及しているものの、その文言はあくまで抽象的であり、説得力を持つ解釈には至っていない。彼女だけではなく、多くのロート研究者たちは、長い間、この「異郷」に適切な解釈を与えることができなかった。例えば、日本で『偽りの分銅』を翻訳した佐藤康彦の解説を参照すると、彼は作品に登場する異郷のアウトローたちを「彼らはしかし無頼の反抗者ではないし、無政府主義者でもない。むしろ、しだいに迫ってくる偏狭なナショナリズムの気配におびえながら、さまざまな民族の差異を忘れて日々を懸命に生きる民衆たちなのである。その意味で彼らは、むしろ、民族の和合を目指して大きな帝国を維持しつづけた賢明なオーストリア主義者の同類なのである」¹⁵と説明しているが、この親ハプスブルク的な背景を、作品解釈に用いることには異論を唱えざるをえないだろう。というのも、異郷のアウトローの登場人物たちは、オーストリア＝ハンガリー帝国の「法」、「官僚主義」、「規律」を体現する、主人公アイベンシュッツに猛然と牙を剥き、最終的には彼の命までも奪っていくからだ。このようにロートの「異郷」は、「在りし日の帝国賛歌」の文脈へ強引に回収され、その文学的な意味、及び機能については、どこか歯切れの悪い説明がなされるにとどまっていた。

しかしながら、この「異郷」をキーワードとして、ロート研究のカノンとされてきた「在りし日の帝国回帰」の解釈圏内から抜けだす動きが生まれる。その先陣を切ったのが、ヴォルフガング・ミュラーフンクだ。彼は1989年に出版したモノグラフィー『ヨーゼフ・

13) Vgl. Maria Kłańska: Die galizische Heimat im Werk Joseph Roths. In: Michael Kessler / Fritz Hackert (Hrsg.): Joseph Roth Interpretation – Kritik – Rezeption. Tübingen 1994, S. 143-156.

14) Ebd., S. 154.

15) 佐藤康彦解説：『ヨーゼフ・ロート小説集3』、平田達治、佐藤康彦訳、鳥影社、1993年、419-420頁。

ロート』¹⁶の中で、作家の「異郷」、「帝国周縁部」の描写に、失われた故郷に対する悲しみではなく、東欧の正統的なユダヤ性、及びハプスブルク帝国といった「伝統的なものからの乖離」傾向があることを発見した。そして、登場人物たちの「異郷での経験」、「孤独」、「故郷、及び拠り所の喪失」は、まさに「近代の特徴」であると結論付け、「伝承されてきた歴史的な文脈」、及び「知覚の喪失」から「個人」が出来るという、モダニズム文学的なテーマをロート作品の中に見出したのだ。¹⁷そして90年代、ミュラーフンクの後を追うようにして、ウーテ・ゲルハルトや、トマス・デュロといった研究者たちが「近代」の文脈上でロート作品の解釈を試みる。ゲルハルトは、ロート作品における国境地帯の描写を、作家の悲劇的な「故郷喪失」の文脈にばかり回収してしまう先行研究の慣習を批判し、「ノマド」、「混合」、ひいては「不潔」といった、ロート作品における東欧のユダヤ性を想起させる概念が、ナチスも利用した、近代の「衛生学的な秩序体系」、及び「国境の線引きにより規定される国家的なアイデンティティ」に抗することを論じた。¹⁸またデュロは、それまで「過去回帰」のイメージと密接に結びついてきた「反進歩主義」のロート像に疑問を投げかけ、ロートがジャーナリスト時代に書いた映画評を渉猟し、その中に、作家の近代技術の精華である映画に対する肯定的な態度が存することを発見する。さらに彼は、小説作品の中に映画からの影響が刻印されていることを論じ、「芸術の新たな可能性には無頓着な、コンサバティブな作家だ」¹⁹と揶揄されたロートの反進歩主義的な作家像に一石を投じた。²⁰

21世紀に入ると、ロート研究は「文化学 (Kulturwissenschaft)」の領域の研究者たちを中心として、新たな局面を迎える。その中で最も重要な役割を果たしたのが、テレゼ・ハルトマンであろう。2006年に出版された博士論文『文化と自己同一性 — ヨーゼフ・ロート作品における非場所化のシナリオ』²¹の中で、ハルトマンは上述したウーテ・ゲルハルトの研究アプローチを引き継ぎながらも、文化人類学者ジェームズ・クリフォードの理論を援用し、ロートをモダンどころか、ポストモダンの文脈上に置き直した。

「〈ノマド〉、〈混合〉、〈不潔〉といった、近代においてはネガティブなものとして扱われる概念が、ナチスも利用した〈衛生学〉に抗するのだ」というゲルハルトの見立てを、ハルトマンは「一元的である」と批判し、そこに「ラディカルな否定性」を見出す。²²その際、彼女はクリフォードの「文化やアイデンティティは先祖の土地に根を張る必要はな

16) Wolfgang Müllerfunkt: Joseph Roth. München 1989.

17) Vgl. Wolfgang Müllerfunkt: Die Modernität des Peripheren. In: Joseph Roth Besichtigungen eines Werkes. Wien 2012, S. 11-26, hier: S. 16.

18) Vgl. Ute Gerhard: Von Paßfälschern und Illegalen – Literarische Grenzüberschreitungen bei Joseph Roth. In: Thomas Eicher (Hrsg.): Joseph Roth: Grenzüberschreitungen. Oberhausen 1999, S. 65-87.

19) Marcel Reich-Ranicki: a.a.O., S. 263.

20) Vgl. Thomas Düllo: Zufall und Melancholie. Untersuchungen zur Kontingenzsemantik in Texten von Joseph Roth. Münster 1994.

21) Telse Hartmann: Kultur und Identität Szenarien der Deplatzierung im Werk Joseph Roths. Tübingen 2006.

22) Ebd., S. 19.

い。むしろ、それらは授粉や（歴史的な）移植過程によって生きながらえるのだ²³という主張を敷衍し、東欧的なものに「肯定」を、西欧的なものに「否定」を見出したゲルハルトの論に対して、それらの相対する概念が衝突を繰り返しながらも、ロート作品の中で融解し、新たな形態に生成していく過程を浮き彫りにした。クリフォードは「周縁化された人々が西洋の想像力によって定義されてきた民族史や歴史的空間に登場する」とき、つまり「近代世界に参入する」とき、「後進的」とされた人々の特異性が、伝統的に過去に結び付けられ、新しいものに対して抵抗するか、受け入れるかのどちらかとなり、「けっして新しいものを作り出せないという、継承された構造」に陥る状態を問題視し、²⁴「根をたたえたひとびとにありうべき未来への経路をひらく」試みを、著書『文化の窮状』（2003）の中で行った。ここで彼が指摘した「突然、後進的とされた人々の特異性」とは、ロート作品の国境地帯に現れる登場人物たち、とりわけ貧しい東方ユダヤ人たちを想起させ、彼らは常にクリフォード言うところの「けっして新しいものを作り出せないという、継承された構造」に陥る危険性にさらされている。ハルトマンは、この「新しいものを作り出せないという、継承された構造」から一歩先へ踏み出し、ロート作品における登場人物たちの「ありうべき未来」が、いかに文学作品内で「生成」されうるのかを論じたのだ。

2012年には、ヴィープケ・アムターとハンス・リヒャルト・ブリットナッヒャーを中心として、論文集『ヨーゼフ・ロート — 憂鬱な視線の近代性について』²⁵が出版される。ここではロート作品における「近代の秩序」、「第三世界の形象」、「物語技法」の三セクションに焦点が絞られ、上述したゲルハルトや、ハルトマンの研究手法を引き継いだ論文の他にも、ロートの文体自体²⁶や、女性描写²⁷の中に「近代性」を見出そうとする、野心的な論文が収録された。また2016年には、アフリカにルーツを持つ研究者ダニエル・ビトーの博士論文『ヨーゼフ・ロート作品における周縁性の美学 — 内的、外的コロニアリズムの交差点上における、ポストコロニアル的な視点』が出版される。彼はこの著書の中で、サイドやホミ・バーバの「ポストコロニアル理論」を積極的に援用し、「ロート作品をアフリカの文学圏へ接続させる」という離れ業をやったのけた。²⁸このビトーの試みは、もはやロート作品が「西欧」、「東欧」の枠組みにとどまらず、様々な世界の文脈上

23) ジェイムズ・クリフォード：『文化の窮状 — 二十世紀の民族史、文学、芸術』、太田好信、慶田勝彦、清水展、浜本満、古谷嘉章、星楚守之訳、人文書院、2003年、29頁。

24) 同上。

25) Wiebke Amthor, Hans Richard Brittnacher (Hrsg.): Joseph Roth – Zur Modernität des melancholischen Blicks. Berlin/Boston 2012.

26) 例えばトマス・ケブナーの「ヨーゼフ・ロートの映画叙述」などは、トマス・デュロの研究手法、領域を引き継いだものであるが、作家が文学作品の中に、近代技術の精華である映画の叙述法を適応させていたことを、より一層明らかにしている。Vgl. Thomas Koebner: Filmische Schreibweise bei Joseph Roth. In: Wiebke Amthor, Hans Richard Brittnacher (Hrsg.): Joseph Roth – Zur Modernität des melancholischen Blicks. Berlin/Boston 2012, S. 227-240.

27) Vgl. Gesa Dane: Frauenfragen – Modefragen? Zu Joseph Roths *Brief an eine schöne Frau im langen Kleid*. In: Wiebke Amthor, Hans Richard Brittnacher (Hrsg.): Joseph Roth – Zur Modernität des melancholischen Blicks. Berlin/Boston 2012, S. 91-99.

で読解可能であることを示し、ロートが「昨日の世界」の作家ではなく、「今日の世界」の作家であることを強烈に印象付けることとなった。

こうして2000年以降、「文化人類学」、「ポストモダン」、「ポストコロニアル」の観点から、ロート研究に新たな風が吹き込まれた一方で、アーカイブ資料、及び作家の自伝的側面に重きを置く、伝統的な研究手法も受け継がれている。²⁹例えば、2008年に創設された「ヨーゼフ・ロート国際協会」の中心人物であるハインツ・ルンツァーは、これまで未発表、または不完全な形での掲載にとどまっていたアーカイブ資料を編纂しなおし、より完全な形で、ロート作品集を刊行しようと目論んでいる。³⁰また2019年、同協会がポーランドのウッチで開催した「ヨーゼフ・ロート国際会議」では、「自伝的側面からの研究」という発表セクションが設けられ、マリア・クランスカが、ロートの同郷作家ゾーマ・モルゲンシュテルンが書いた自伝的書物『ヨーゼフ・ロートの逃亡と最期』（1994）について論じ、ヴィクトリア・ルンツァーが、ロートのギムナジウム時代の恩師ヘレネ・スツァユノカとの関係を、新たに発見されたアーカイブ資料をもとに発表した。³¹このことから、アーカイブ資料、及び作家の自伝的側面に重きを置く研究手法が、最新のロート研究においても、いまだなお重要な位置を占めていることが分かるであろう。

ロート研究は現在、世界中の至る所で、各国の研究者たちのユニークなアプローチのもと、発展を続けている。しかしながら、私たちは結局のところ、この問いに戻らざるをえないのではないかと。「一体、ヨーゼフ・ロートとは何者だったのか？」と。ロートは現在も、彼の初期小説の主人公フランツ・トゥンダの如く、自身の姿を変幻自在に変えながら、我々から「果てしなき逃走」を続けているのだ。

28) Vgl. Daniel Romuald Bitouh: *Ästhetik der Marginalität im Werk von Joseph Roth – Ein postkolonialer Blick auf die Verschränkung von Binnen- und Außerkolonialismus*. Tübingen 2016.

29) 例えば2009年にはヴィルヘルム・フォン・シュテルンベルクによって、新たなロートの伝記が出版されている。Vgl. Wilhelm von Sternberg: *Joseph Roth. Eine Biographie*. Köln 2009. また日本でも2013年、平田達治によって、ブロンセンの手の届かなかったアーカイブ資料の検討から、新たな作品解釈が試みられる書籍が出版されている。平田達治：前掲書（『放浪のユダヤ人作家 ヨーゼフ・ロート』）。

30) 2021年に同協会員向けに限定する形で、「1921年の手紙とその他の草稿」、及び「1921年の新聞掲載記事」が書籍化された。また、ルンツァーが既刊のロート全集の問題点をあぶり出した論文も発表されている。Vgl. Heinz Lunzer: *Das Werk, das Leben Joseph Roths. Kennen Wir schon alles?* In: Artur Peřka, Christian Polk (Hrsg.): *Joseph Roth – Unterwegs in Europa*. München 2021, S. 3-20.

31) この会議の内容は書籍化された。Vgl. Artur Peřka, Christian Polk (Hrsg.): *Joseph Roth – Unterwegs in Europa*. München 2021.